

例句

| | |
|------------------|-------|
| 咲くものを散るものを春惜しみけり | 稲畑汀子 |
| 任一つ終へし余韻に春惜しむ | 山田弘子 |
| 東京をふるさとにもち春惜しむ | 能村登四郎 |
| 春惜しむ一人を降ろす無人駅 | 橋口礼子 |
| 惜春のわが道をわが歩幅にて | 倉田紘文 |
| 惜春の虚子の世遠く偲ばるる | 安原葉 |

みそぎ橋掲載句

| | |
|----------------|--------|
| 強がりも生きる励みや梅開く | 岩澤幹江 |
| あるじ無き古刹静もる臥竜梅 | 河村下松 |
| 蒼穹に一山霞む梅の里 | 増田しげる |
| 箸置きはつぼみ三つの梅の枝 | ありんこ有田 |
| 寒平目絵皿のすけし薄造り | 石橋静江 |
| 降る雪やまだ生きるぞ巨樹自信 | 熊谷壽瑛 |
| 人の世や時に心に薄氷が | 小沢一郎 |
| 草粥や腹に染み入る命かな | 浜田こうき |

葉山今昔 (十五)

宮崎惠潮

「島山重忠と島山城跡(陣地)」「木古庭」という地名との繋がりを探る

前回、恩賜記念葉山託児所を探った。今回は木古庭にある島山という山と深掘りする。葉山町内や町境に位置する標高二百メートルを超える山々は、主に「三浦アルプス」と呼ばれる山城の東側に集中している。主な山々は、二子山(上二子山)二百八メートル、下二子山二百六メートル、阿部倉山二百メートル、乳頭山(矢筈山)二百二メートル、茅塚(かやづか)二百十二メートルと、本題の島山が二百五メートルとなる。これらの山々は、三浦半島の背骨にあたる起伏の激しいエリアです。標高二百メートルながら急峻な斜面や入り組んだ谷戸(やと)が多く、古くからの境界線や軍事的な要衝(横須賀鎮守府に関連する施設など)としての側面も持っている。三浦アルプス(二子山山系)の尾根道は、現在でこそハイキングコースとして親しまれているが、古くは相模湾側(葉山・逗子)と東京湾側(横須賀)を結ぶ重要な生活道や交易道でした。そのため、山深い尾根道でありながら、往来の安全を祈願した石仏や、物資運搬の要であつた馬の供養塔などが現存もひっそりと佇んでいる。三浦アルプスの複雑な尾根筋の中でも、南尾根の縦走路中継地点の小高いピークにある観音塚にある上手観音と馬頭観音は、共に江戸時代に造立さ

れ、肩を並べるように仲良く建っている。このルートが古くから人や荷馬の往来に利用されていたことを如実に物語る史跡だ。逗子沼間へと抜ける北尾根の古道沿いにある馬頭観音は、文政三年（一八二〇）造立の銘が確認できる。この地域として馬頭観音の比率が高いのは、急峻な峠越えにおいて、荷を運ぶ農耕馬や駄馬への負担が大きく、その供養と道中安全の祈願が切実だったためだ。木古庭や上山口の村人たちは、この尾根を越えて横須賀の田浦や平作へと抜け、炭や農作物、海産物を交易した。これらの石仏は、単なる信仰の対象というだけでなく、三浦半島の東西をつなぐ物流の痕跡そのものだ。

木古庭にある畠山は、鎌倉殿十三人で有名な武将の一人である畠山重忠の伝承に深く結びつく。治承四年（一一八〇）、重忠公は平家方の軍勢として、源頼朝に味方した三浦氏の本拠地「衣笠城」を攻めた衣笠城合戦だ。この際、三浦半島を南下してきた畠山軍が陣を構えた場所が畠山だ。畠山城と木古庭の繋がりをみると、「瀧不動堂（木古庭不動尊）」と「不動の滝」の伝説だ。重忠公は衣笠城を攻める際、自身の守り本尊である不動明王に戦勝を祈願した。無事に勝利を収めた後、凱旋の証として木古庭の地

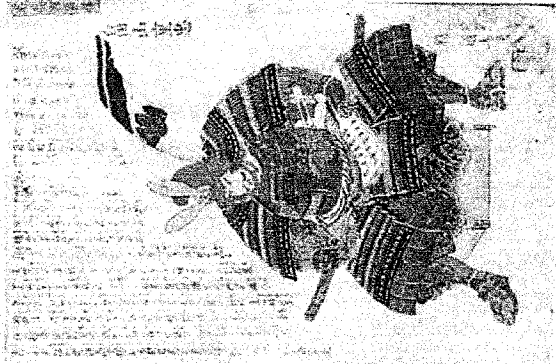


図1：畠山重忠公 歌川国芳
（『勇奇朝総楼』「名高百勇伝」）

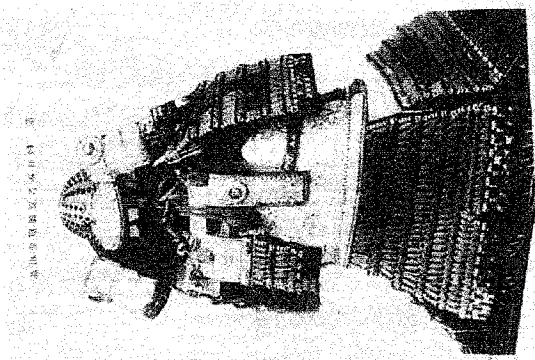


図2：国宝 島山重忠着用の
御衣鉢社蔵

に、この不動明王を御請したところ、一夜にして山から清水が湧き出し、滝が生まれたという伝説が残る。この不動明王は、現在でも「重忠公の身代わり不動」として地元で親しまれ、お堂の傍らには「畠山公一族顕彰慰霊碑」が建っている。

木古庭という地名と畠山城跡の繋がりをみると、古代日本語では防衛のための柵や土塁、砦（とりで）のことを「キ」と呼んだ。飛鳥時代に築かれた福岡県の防衛施設「水城（みずき）」や、岡山県の「鬼ノ城（きのじょう）」、「稲城（いなぎ）」などがその代表例だ。「木古庭」の最初の音である「木（キ）」も、単なる樹木ではなく、「城（砦・柵）」をさした。次に「古庭（コバ）」が「木場・木庭・小庭」などと表記されるという点も重要で、山の用語において「コバ」とは、尾根や山腹にある「小さな平坦地」や「木を伐採して切り拓かれた場所（木場）」、「ちよつとした休憩所」を意味する。山中に陣や砦を築くにあたっては、兵を駐屯させたり馬を繋いだりするための平なスペース（山城でいう「曲輪（くるわ）」のような場所）が不可欠だ。そもそもその場所が軍事拠点に適した「キ・コバ（城の平地）」と呼ばれるような地形だった。

氏」に由来すると云われる。秦一族は大陸から高度な農耕技術や土木技術、養蚕（機織り）をもたらした。彼らが切り開いた農耕を行った土地が「ハク（秦）」と呼ばれ、のちに畑や島という漢字で定着した。畠山重忠の血筋は、「桓武平氏（秩父氏）」だ。しかし、彼が領地として名字の由来とした武蔵国男衾郡畠山郷（現在の埼玉県深谷市）は、古くに秦氏などの渡来人が開拓した「秦の山＝畠山」であった。

秦一族がこの周辺に住み継いだという伝承だ。古代、相模国（神奈川県）は渡来人が多く入植し、開拓を進めた地域が「秦野（はだの）」市だ。古代の交通網において、西日本から関東へ向かうには、三浦半島を経由して海を渡る「古東海道（海の道）」が重要でした。高度な航海術を持っていた渡来人（海人族）にとって、葉山や三浦半島の沿岸部はまさに玄関口であり、彼らがこの地に定着して独自の技術を伝えたことは十分に考えられる。

もう一つ、周辺の地名で面白い符合がある。畠山重忠が攻めた三浦氏の本拠地は「衣笠（きぬがさ）城」だ。秦氏は別名「機織（はたおり）氏」とも呼ばれるほど、絹（きぬ）や織物の技術に長けた一族だ。「衣（絹）」という文字を冠する衣笠の地名周辺に、古くから織物や養蚕の技術を持った渡来人（秦氏の系譜）が住み着き、技術を伝承していたから、そ、そうした地名が生まれたのではないかと推測する郷土史家もいる。

木古庭にある小字「高祖坂（こうそざか）」や「高祖井戸」の「高祖」とは、日蓮宗の宗祖・日蓮のことを指す。建長五年（一二五三）、安房を旅立った日蓮が鎌倉へ向かう道中、この木古庭の地（当時の古東海道・鎌倉街道の要衝）に数日間滞在し、自ら切り開いた坂が「高祖坂」、法力で水脈を掘り当てたのが「高祖井戸」とであると伝えられる。この「高祖（日蓮）」と「畠山一族」を木古庭の地で直接結びつけているのが、高祖坂の近くに建つ日蓮宗本圓寺だ。本圓寺は、畠山重忠が勧請した「滝不動（身代わり不動堂）」を現在管理する。興味深いことに、本圓寺の寺紋は畠山家と同じ「五七の桐」だ。日蓮の父は「實名重忠（ぬきなしげただ）」であり、畠山重忠と同名だ。さらに、日蓮の母・権菊が、実は畠山重忠の血筋（末裔や縁者）に連なる人物であるという「畠山重忠有縁説」が古くから一部の郷土史・仏教史の研究で指摘されている。つまり、木古庭という土地は、畠山一族の伝承地であると同時に、その血脈を引くとされる高祖・日蓮が奇跡を残した地として、二重の歴史的因縁で結ばれている。